

吉村達次・「経済学方法論」

相 沢 秀 一

本書は故京大経済学部教授吉村達次君の遺稿を大阪市大経済研究所教授林直道君が京大経済学部助教池上淳君らの協力によって編集したものである。遺稿とはいうものの草稿若干を除いては本書を構成する諸論稿の大方は既発表のものである。然しいま、この様な著書の形態において諸論稿を通読すれば、かつて個別的に発表された都度読んだ場合とは異つた新鮮な印象を受けとる。なおまた既発表の論稿とは言つたが、良心的な故人はこの著書の内容たらしめるべく企図されたとき飽く迄も完璧なものたらしめるべく推敲に余念なかつたとき。昨春秋上梓さるべき予定にて、夏の休みに入る前すでに九分通り出来上つてはいたものの故人の良心は最後の仕上げに異常な苦心と時間を費やし、ついに生前彼自らの手よつての出版とならなかつたのである。故人の死は文字通り夢想だになつたことである。いまこの書物を通読し

て再び悲しみを感ずると共に、この良心的な学究の死にたいする痛惜の情一入新たなものある次第である。

さてこの小論の意図するところは簡単な書評であるが、先ず本書の編別構成を示すことから始めよう。第一部は「経済学における理論と実践」と題され、五つの章、内容的には既発表の七つの論文と遺稿の三論文がこれに付加されて成り立っている。第二部は「国民経済・世界経済・恐慌」の論題のもとに、既発表の三論文・三章を以て構成されている。詳しくは第一部、(一) 経済学における理論と実践、(二) 資本主義の運動法則における論理的なものとしての歴史的なもの——(1) 資本主義社会の運動法則の論理構造、(2) 本源的蓄積の分析視角、(3) 経済学の歴史的出发点、(4) 経済学の現実的出发点について、(三) 宇野氏「経済法則」論批判、(四) 宇野弘蔵「経済学方法論」、(五) 経済学と弁証法、補論1、経済学・哲

学手稿とマルクスの実践概念、補論2、三段階論批判、第二部、(一) 国民経済・世界経済・恐慌、(二) レーニン「帝国内義論」の段階規定について、(三) 現代資本主義と国家、が本書の内容である。本書はその副題に「宇野理論批判」とうたっているが、吉村君の展開する「経済学方法論」は宇野方法論の批判を必然化さすが故に副題の意図するところは充分に首肯できる。いうまでもなくマルクス経済学の方法は唯物弁証法の立場に立つものであり、マルクス自身が「経済学批判」において語る如く、彼の経済学研究を指針として貫いている赤い一本の基本線は唯物弁証法的な歴史観であるが、この史観の基礎づけはマルクスの市民社会の経済学的究明によって与えられたという関係にある。「その合理的な姿勢では、弁証法は、ブルジョア階級およびその理論的代弁者たちにとり、一の痛憤事であり、一の恐怖物である。というわけは、かかる弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまたその否定の・その必然的没落の・理解をふくみ、どの生成せる形態をも運動の流れにおいて・したがってまたそのすぎ去る側面から・理解し、何ものによっても畏伏せしめられず、その本質上、批判的かつ革命的であるからである」

（『資本論』・第一巻・第二版への後書き）、と言われている弁証法を堅持する吉村君にとっては、唯物史観の経済学研究との無縁を主張し、弁証法を正しく理解せんとする態度をとられぬ宇野教授は許しえぬ修正主義者であり、その理論を徹底的に叩かねばならぬと考えるに至ったことは当然のことである。

宇野教授の経済学の三分化は、原理論はたんに氏の想定する純粹資本主義の理論的把握を任務とするものであり、その結果たる法則は現実の資本主義を貫く法則とは無縁のものであり、段階論は特殊事情にある各国資本主義の殊には主要な代表的産業において示される資本主義の発展段階にある経済の形態把握にとどまって段階を必然した法則の究明を断念し、現状分析は文字通り現状の分析的把握にとどまり、この経済学分科の三者相互の内的連関は関知しないところである。理論と実践との関係を峻別して、理論の実践化、マルクス経済学の秀れて実践科学である性格を拒否し、したがって「恐慌の経済学であり革命の経済学」であるという特性を見ようとする。加之、学問は思惟する人間のかかわる任務であり、実践・政治は意欲する人間すなわち政治家の領域であ

る、として学問の中立性を守らんとするが如くである。かかる考えの生まれるにいたった根拠は宇野教授の「経済学の方法論」そのもののうちに宿されている。吉村君の宇野教授の見解にたいする理論的批判はもっぱら此のところにかかる。

宇野・方法論の集約は教授の著書『経済学方法論』にみられるのであって―筆者も亦この著書についての批判的紹介の一文を書いている（大阪市大・『経済学雑誌』・四六巻・六号）―、吉村君もこの著書を取り上げて批判を行なっている。要するに本書はマルクス経済学の方法について、著者が主要課題とした、経済法則の意義や、論理と歴史との関係、レーニン「帝国主義」論の検討評価、さらには国家独占資本主義の問題、等の諸項目はすべて経済学にとつての主要な基礎的理論分野の問題ではあるが、これを取り上げて論究することは同時に宇野・理論の批判に通ずるものである。かかる意味合からして、本書のサブタイトルは失当ではない。

凡そ書評は系統的にその書物の内容を紹介しつつ批判を行なうという形式によるべきものであろうが、そしてまた、本書の問題意識はいづこにあるかということも、またその問題意識においてどういう問題を取扱っているかということも、

さきに記した本書の各章・各節―尤も本書には章別はないが一応その様な体裁に書き換えたのである―で取り上げている問題を一覽すれば容易に理解されうるであらうと思われるので、以下極めて非系統的ではあるが、通読して関心をもたされた若干の項目についての論評を行ない書評の責任を果すことにしたいと思う。

(一) 経済学の方法について

マルクス経済学の特異な方法は弁証法にある。いわゆる下向・上向の方法である。具体から抽象へ、そして抽象から具体へ。表象における直観における研究の出発点たる具体は思维的な抽象力によって下向分析されて抽象にいたり、その抽象的な範疇から上向の旅路を辿って再び具体に還る。思想的な具体物として頭脳において我がものとされた具体である。思维運動はかくの如く一つの円環運動である。然し弁証法的認識はそこにとどまらない。「本質のより深い内容、すなわち本質それ自体変化するものとして、その質的發展過程を諸概念の複雑な諸関連（いわゆる事物の内的構成）として全面的に把握する思维の過程でなくてはならない。終局点が同時に

質的に新たな円環の出発点としてあらわれるような思惟の形式でなくてはならない。これは自己完結的な運動としての円環運動の崩壊にはかならないであろう。こうして思惟の全運動は円環的運動を内包しつつ、常にそれを打ち破って質的に新たな円環運動に移行・前進してゆく螺旋的軌道をえがいて進行するものとなるのである。……理論的体系はこのような螺旋の性格をもたねばならないのである」（一一―一二頁）。

まさに主張のとおりであって、ここにすでに論理的なものと歴史的なものについて関説される後統論文の伏線がある。これがマルクスの弁証法である。概念の簡単から複雑への論理的展開は具体物を把握するための思惟の様式に過ぎないのであって、事物自体の生成過程ではないのであって、「理論的体系とは対象の内的組織を諸概念の連関としてえがきだしたものにほかならない」（四頁）ことからして当然のことではあるが、それを曲解するならば論理的なものとは歴史的なものとの分離が結論づけられる。吉村君はかかる見解は形而上学的に概念の固定化を行なうからであって、マルクス経済学は之に反して「概念の固定性の外観を暴露し、概念そのものを生成・転化するものとして把えることによって、客観過程の

変化・発展を反映しうるものとした」（一〇頁）、と説く。

具体から抽象へという場合、抽象の限界を支えるものは何か。『資本論』は商品を抽象の極限として、それを端緒として、商品そのものの本質把握のために価値に抽象し、抽象的・人間労働にまで抽象した。端緒は然らば価値ではないのか、という問題が提起されよう。『経済学批判』序説にいう——範疇としては交換価値はノアの洪水以前の定在であるが、その実存は既に与えられている具体的な生きた一全体の抽象的一面的な関係にすぎない。ここにいう具体的な生きた一全体とは商品生産関係であり、商品そのものである。具体（資本主義社会）から抽象への極限が商品にとどまる根拠は、抽象は実践に基礎づけられているからであり、かかる実践は対象の実践に他ならず、それによってこそ抽象化を行なう目的が規定されているからであって、かかる対象の実践は階級性によって定められ、資本主義を止揚すべき任務をもった階級性によってのみ正しく措定される。このように説く吉村説は納得できる。これに彼の科学的実践観の論述がつづく。

ただここで気にかかる叙述は価値法則についてである。彼が「価値法則の貫徹が不可避免的に富と貧困の敵対的対立を生

みだすならば、価値法則の合理性は資本家のものであり、労働者階級にとっては非合理的なものでしかない」（七頁）、と説く場合、価値法則をいかに考えているのであるか。価値法則は、人間の社会的な生活行為が商品生産として行なわれていくとき、人間の営む経済の世界が人間の外にある第二の自然の如く独自の運動を展開し、それを規制する法則であり、いわば商品生産社会を前提するかぎり自然法則であり私の言う基礎法則であって、資本家にとっても労働者にとっても、合理的とか非合理的とかいうことにはならない。商品生産社会を是認するか否認するかという評価の次元においては別問題ではあるが。総じて吉村君が、「価値法則―実際は剰余価値法則であるが」（四七頁）、とかいう場合、価値法則と剰余価値法則の区別を明確にしない宇野・理論を批判する際には（一三五頁）正しく理解されているにもかかわらず、その叙述表現は誤解を生み易い。宇野教授が商品生産社会において「いわば自然法則のように客観的に作用するところの経済法則」が価値法則であると捉えたのはその限りだしなのであるが、その故に、資本主義を純粋型において、無限に繰り返す循環運動態であると解釈したところに誤りがあるのである。

吉村達次・『経済学方法論』（相沢）

って、この誤りは、再生産構造の分析視点で考察しようとしたが故に生じた（一七〇頁）ものではない。宇野教授の基本的な誤まりは、研究対象たる経済の世界を生産関係として捉えないというところにあるのであって、経済の客観過程は再生産過程として展開されるものであるかぎり再生産構造への分析視点は誤まりではない。吉村君の宇野・理論の批判は、価値法則の支配する資本制商品生産経済の場に、社会発展の一般的歴史法則が資本制社会に特殊具体化されて基本的経済法則となったものに支配規制されて発展する資本主義生産が、どのような質的な、また形態的な変化を受けるかという点を充分にふまえて批判のメスを入れるべきであった。この点若干の不満が存する。したがってまた宇野教授が資本制商品生産社会の基本的矛盾を労働力の商品化においたが、これはP・スージーの所見にもみられる、価値法則の支配外にある独特な商品であるという点に労働力商品化の不合理性を求めたのであって、此の点への批判が抜けているのも右に帰因するといわねばならない。

(二) 論理と歴史

弁証法的認識方法にもとづいて把握された資本主義の理論像は、その構造の内的連関に着目して、抽象から具体へ、簡單から複雑へ、という論理的な概念の展開によって構成されている理論的体系であり、具体的には経済学の篇別構成はそのまま資本主義生成の歴史的順序に対応するものではなく、「むしろ近代社会の内部においてそれらの諸範疇が相互に如何に関係しあい、編成されているかによって、論理的配列の順序が決定さるべきで」（六三頁）あって、土地所有―地代がむしろ資本―利潤の論述の後にくるべきものであることまさに吉村君の言うとおりであるが、このことからただちに論理的なものとの歴史的なものとの無縁を結論づけようとする一部の論者の主張には与みしえないこと、私も亦吉村君と同一見解である。「資本論」の論述が論理的であるのみならず歴史的事でもあることは、特に第一卷・第七篇・二十四章・「謂わゆる本源の蓄積」において特徴的である。本書は、『資本論』における論理と歴史とを考察するに当って、本章を取り上げている。

『資本論』の第一卷の「直接的生産過程」の究明はもっぱら、資本制生産様式を所与のものと前提し、その上に立って、

商品、貨幣、資本への展開を説き、自立化した価値が資本として自己増殖を行なう秘密を、資本の直接的な（価値―剰余価値）の生産過程の分析を行なう。然しながら「貨幣の資本への転化」において、封建制から資本制への移行の理論的歴史的根拠を明示している。商品、貨幣、資本、への歩みは、資本主義の内的関連においての論理の展開ではあるが、それが純粹に本質的に考察されるかぎり資本主義生成の歴史的発展でもありうるためには、端緒の商品が先ず問題として取り上げられねばならない。冒頭文句に明らか如く、資本制生産様式の社会が前提されている以上、それは資本制商品である。然し資本制商品の把握は、一般性における商品の本質的把握が基礎におかれねばならない。かくて資本制商品からの抽象化された所産が単純商品であり、この抽象化は現実の資本主義社会において不断に行なわれている抽象であり、且つかかる単純商品は歴史的に実在した商品である。かく考えてのみ経済的運動法則の論理構造が明らかとなる。「歴史の始まる」ところで、思惟の進行もはじまらねばならない」といふ句を引用しつつ吉村君は説く―「このことはまた、出発点たる商品が、資本制商品の抽象的規定たる限りでは資本の円

環的運動の軌道の内在存在することを意味すると共に、資本の歴史における単純な商品生産の實在に基礎づけられている限りこの円環運動の外に見出されなければならないことを意味する。

出発点が円環の内であり外であるということによって、資本制生産の内的組成の体系的論理が、同時にその生成・発展・消滅の歴史的運動の論理でもありうるのである」(二三頁)、と。まさにその通りである。然しこれは飽く迄も資本制生産

様式内部での論理的且つ歴史的展開であって、資本の成立は、新しい一つの時代を劃するものである。資本制生産関係の成立は、自然的関係の所産ではなく、過去の歴史的発展の成果である。かかる認識に立つてのみ、資本主義の運動法則における論理的なものと歴史的なもの、との関係が正しく理解される。かような見地において、第二十四章のもつ意義の重要性をみようとするのが吉村君の立場である。「本源的蓄積

の分析視角」を明確にし、ついで「経済学の歴史の出発点」を、最後に「経済学の現実の出発点」を、論究して、運動法則が、たんに諸現象を支配している法則にとどまらず、一の形態から他の形態の移行の法則であることを主張する。このこと自体、一般的には少しも異論はないのであるが、マルク

スの言う「ブルジョア社会の経済的運動法則」について、今少しく突きこんだ究明が望まれる。

吉村君の右にみた基本的な考え方を前提すれば、真正面から宇野批判を試みている、「宇野氏『経済法則』論批判」と書評の形式による「宇野弘藏『経済学方法論』」については、これ以上閑説する必要はあるまい。批判の方向においては私もまた同感である。ただ、宇野・経済法則は無限にくりかえす循環運動の歴史的でない法則であること周知の通りであるが、その際、価値法則との関連において、再生産構造分析の側面、という言葉が盛んにつかわれるが、本論稿(一)において述べた如く、打撃を与えるには弱いのみならず誤解を生み易い叙述である。

(三) 再び経済法則について

以上で本書第一部の内容についての簡単な紹介と読後の所感を述べたが、第二部の三つの論文はそれぞれ有斐閣『マルクス経済学講座』第一巻、『経済論叢』九十四巻・五号、および豊崎教授還暦記念論文集『現代資本主義研究』に収められたものの再録である。先ず第一論文は経済法則、国家、

についての基礎概念を明らかにし、資本主義による国民経済および世界経済の形成過程の必然性を理論的に解明して、恐慌の問題にいたって完結している。『講座』という多分に啓蒙的な使命をもった書物に収められたものであるため、高度の理論的段階のものではない。そのことを前提しつつも尚お且つ気にかかるのは、第一部でも閑説したところであるが、経済法則の問題である。『資本論』が主要課題とした「経済的運動法則」という場合の法則は運動の法則であって、無限に同一の質量が同一の形態をもって同一の軌道を無限に繰り返す、自然科学的時間があっても歴史的時間のない循環運動の法則ではなく、質的にも変り形態的にも移行する歴史法則であり移行の法則である。そしてその基礎に階級闘争が存在していることまさに吉村君の主張する通りである。だが彼が「もし、資本の運動が単に自発自動的に無限にくりかえされる再生産的循環運動にすぎず、質的転換期としての始点も終点ももたないならば、移行と階級闘争の必然性もまたないはずである」（一七〇頁）、と言いきるとき、またしても再生産過程という言葉がでてくる。経済社会の客観過程はいついかなる場合でも再生産過程とし現われる。ただ資本制経済に

あつては資本の再生産過程としてあらわれるに過ぎない。この資本のロゴスが純経済過程の展開であつて政治過程と無縁だとみるならば階級闘争が導入される余地はない。恰もかつて有沢広己氏が『日本における平和政策の経済的基礎』という『世界』（昭和二十八年六月号）所載の論文において、日本経済のロゴスは平和を指向しない。若し平和を求めんとするならば外部からの政治力の加わることが必要である、と説かれたのと軌を一にする。資本の再生産過程とは資本関係すなわち資本制生産関係の再生産過程であり、ここに階級対階級の関係がすべく存在している。かかる認識立場に立つてはじめて経済学が「政治経済学」たらねばならぬ根拠がある。これは私の持論であるが、この観点に立てば吉村主張は不充分である。

（四）レーニンの段階規定

『資本論』理論が独占以前の段階における資本主義の一般的基礎的理論であるにたいし『帝国主義』論が独占段階における資本主義の一般的基礎的理論であるという場合、『帝国主義』論が『資本論』理論の継承発展・その深化であるとい

う意味である。このことの主張は、『資本論』における論理と歴史の関係、経済学と唯物史観との関係、の正しい認識にもとづく。右の関係を認めないならば、レーニン理論は「現代世界経済の具体的Ⅱ経済的現実」から引きだされた段階論である、ということとなる。このことは同時に、『資本論』は非歴史的な非現実的な、たんなる抽象の所産である「純粹資本主義」にかんする原理論であらねばならぬ、という主張に通ずる。レーニンがカウツキーの「超帝国主義」論を批判して、「もし純経済的見地を『純粹』の抽象と解するならば、言いうるすべてのことは、要するに、発展は独占へむかつてすすんでおり、したがって一つの全世界的独占へむかつて、一つの全世界的トラストへむかつてすすんでいる、という命題に帰着するだろう。しかしそれは、……完全に無内容である」(全集・訳本・二二卷・一一七頁)、と言っているが、彼が『帝国主義論』の第七章において帝国主義の定義づけのために抽出した五つの経済的指標はもっぱら純経済的見地からの考察の所産ではあるが、どこどこまでも歴史的、具體的時代としての、金融資本の時代の純経済的諸条件について究明しえられたものであって、而かもそれは『資本論』理論の延長

の上に構築されたものである。「マルクスの『資本論』が資本主義一般の基本的特徴―資本主義経済の内的組成―を明らかにすることによって、資本主義の歴史的発展法則をも明らかにしている所以があるのであるが、他方では、資本主義の発展とともに資本主義経済の一般理論が二層その具体的内容を豊富にしなければならぬわけがあるのである。……レーニンの『帝国主義』論はまさにそのような延長上の作品にすぎない。資本主義の発展そのものによって変化せしめられるところの資本の運動の歴史的条件的変化と、それによって形成される特殊性を反映するかぎり、『帝国主義』論は独占資本主義という特殊段階の理論であるが、……むしろ、これらの特殊段階が―初期資本主義をふくめて―資本の論理的・歴史的運動の必然的結果として、資本の一般的運動法則の内容を構成するのである。かかる歴史的制約性を自己の本質的内容としてふくむことよってのみ、一般性は無内容な空語ではなく、豊富な具体性を展開せしめるのである」(二一四頁)、と吉村君の説く見解は首肯できる。全般的危機は現代国家独占資本主義にとつては外的条件ではあるが、然しそれは独占資本主義の生みだしたものであり、同時にそれは

独占資本主義の運動を内容的にも規定するものである。此の関係を否認するところに、生産力理論の視点に立つ国家独占資本主義論が生まれてくる。これらはレーニンの『帝国主義』論を段階論と規定する発想と共通する所産である。

（五）むすび

第三論文は経済にたいする国家の役割を現代資本主義と国家との関係において論じたものである。ここでもまた吉村君の関心は移行法則としての経済社会の発展は階級闘争を媒介とするのであり、闘争は政治過程の事態であるが、その際、国家、政治、と経済法則とがどう関係づけられるか、ということである。このことは社会法則の特異性を認識することによって容易に理解されうることであるが、吉村君の次ぎのよる主張はその限り正しい。「経済学が政治経済学たらざるを得ない所以は、移行の法則をあきらかにしようとするかぎり、主体的要因を移行の本質的な一要因としてみとめざるをえない点にあり、しかも依然として経済学たる所以は、その要因を不可欠な与件として前提しても経済学と唯物史観の正しい関連が把握されているかぎり移行の必然性の科学的認識

をそこなうものではないからである」（二二八頁）。

此のような見地に立つて全般的危機と移行法則を問題とし、国家独占資本主義の必然性を論述し、国家下部構造論を批判し、生産力の社会化に依じての資本主義体制内での生産関係の社会化を云々する構造改革論を論難する。筆者のかつて論述した見解（拙著・『経済学基礎理論』第八章）と基本的に一致する。

要するに本書ははしがきにおいて述べた如く既発表論文の集成ではあるが、一貫して読むことよって改めて再た新鮮な感慨を読者に与える。本書を貫く革命的実践意識に著者の良心的な学究心を感じさせる。その実践意識は鋭敏である。その反面、時には荒刷りの箇所もあり、また個別的な独立論文からの集成である故に、重複せる箇所も発見されるが、極めて良心的な学究の成果たることを認めるに吝かではない。